

第17回 千里浜再生プロジェクト委員会 会議概要

1. 日 時：令和7年2月5日（水） 14：00～16：00

2. 場 所：石川県庁 11階 1109会議室（WEB会議併用）

3. 議事

1) 議事公開の可否について

- ・ 委員長から議事公開の確認が行われ、委員の了承を得た。

2) 千里浜再生プロジェクト委員会 検討資料説明【資料－3】

- (1) これまでの経緯
- (2) 定期モニタリング成果に基づく実態解析
- (3) 昨年度（令和5年度）の陸上養浜の結果
- (4) 今年度（令和6年度）の陸上養浜状況報告
- (5) 今年度（令和6年度）の海上採取・投入の結果
- (6) 今後の侵食対策方針
- (7) 海岸保全の意識向上のための取組み（ソフト施策）
- (8) まとめ

3) 議事録及び資料公開の可否について

- ・ 委員長から議事概要及び資料公開の確認が行われ、委員の了承を得た。

第17回 千里浜再生プロジェクト委員会 議事概要

各委員からの主な質疑・意見

(1) これまでの経緯 (資料 P3~6)

- ・ 特になし。

(2) 定期モニタリング成果に基づく実態解析 (資料 P7~12)

- ・ 9月の汀線変化について、令和6年度は減少傾向であったが、これまでの傾向では前進と後退を繰り返しているため、来年度は前進することが考えられる。今後もモニタリングを継続することが重要である。
 - (委員長)千里浜海岸の平均的な汀線変化は前進と後退を繰り返しているが、局所的に過去最低の砂浜幅を記録している。砂浜幅 20m を目途に管理を進めていくことが重要である。
- ・ 平成21年以降の基準点から汀線までの距離は年 0.2m 前進しているが、砂浜幅で評価した場合はどのような傾向か。
 - (事務局)砂浜幅からの評価も同様であると確認している。
 - 令和6年度で見ると高波浪の影響等で侵食傾向であったが、長期的にみると砂浜幅は回復傾向と認識してよいか。
 - (事務局)その通りである。
- ・ 今浜人工リーフ付近の砂浜幅は回復傾向であるが、今浜人工リーフ南側の砂浜幅はどうなっているか。今浜人工リーフ付近に堆積することで南側が侵食することを懸念している。
 - (事務局)今浜人工リーフ南側も測量を実施している。平均砂浜幅よりも狭い箇所であるが、令和6年度の砂浜幅は近年の中では増大していた。
 - (委員長)今浜人工リーフ南側の評価は今後も実施していく必要がある。

(3) 昨年度 (令和5年度) の陸上養浜の結果 (資料 P13~16)

- ・ 陸上測量成果について、令和5年12月(青線)が養浜直後という認識でよいか。
 - (事務局)測量時期と養浜時期が前後している箇所があるため、全ての箇所で陸上養浜後ではない。
 - 3月(赤線)で全ての養浜材が流出したという認識でよいか。
 - (事務局)その通りである。
 - (委員長)養浜範囲より広い範囲でモニタリングしており、養浜している箇所では養浜材が流出しているという認識でよいか。
 - (事務局)養浜の影響を把握するために広い範囲でモニタリングしており、砂浜が維持されていることを確認している。
- ・ 3月(赤線)を見ると養浜前と変化していないように見えるが問題ないか。
 - (事務局)冬季は侵食が進行する時期であるため、陸上養浜をしなければ砂浜が維持されなかったという見方もしている。

- ・ 陸上測量成果では短期的な変化を確認しているが、経年変化よりかは短期的な評価をしているという認識でよいか。また、陸上養浜箇所の変動等を含めた長期的な分析は実施しているか。
 - (事務局)陸上養浜の前後で効果を検証している。深浅測量成果を近年実施しているため、現状では長期的な評価は実施していない。汀線測量にて長期的な砂浜幅の評価を行っている。
 - モニタリングごとに目的をもって実施していることを承知した。引き続きモニタリングを継続していただきたい。
- ・ 11月と3月の変化を測量成果より比較しているが、毎年測量されているため令和5年3月と令和6年3月で重なることは可能であるか。
 - (事務局)可能であるが、現時点では評価を行っていない。
 - (委員長)測線ごとの長期間の測量はあるものの、岸沖方向距離が短い測量成果は測線間隔が狭く実施できるが、岸沖方向距離が長い測量は測量間隔が粗くなっているのではないか。
 - (事務局)費用面も含めて、測量間隔が狭く岸沖方向距離が長い測量が実施できていない。目的に応じて効率的にモニタリングを継続していきたい。

(4) 今年度(令和6年度)の陸上養浜状況報告(資料P17~19)

- ・ 特になし。

(5) 今年度(令和6年度)の海上採取・投入の結果(資料P20~28)

- ・ 海上投入量は毎年増やしていくのか。
 - (事務局)養浜量は令和5年度技術専門部会でシミュレーションしており、最低砂浜幅35m、平均砂浜幅50mを確保するために5.5万 m^3 /年の養浜量が必要と試算している。海上投入4.5万 m^3 /年、陸上養浜1.0万 m^3 /年の内訳で今後も継続する予定である。
- ・ (委員長)海上採取箇所の埋め戻りのメカニズムについて詳細を教えてください。
 - (事務局)海上採取箇所の断面図について、各年の採取箇所の断面図を整理した。令和5年採取箇所は十分に埋め戻っていないが、令和3年採取箇所は令和5年採取箇所と比較してよく埋め戻っている。要因の1つとして、令和3年採取箇所のほうが等深線に対して平行になっているため、砂の移動方向と海底地形の関係があるのではと考えている。

(6) 今後の侵食対策方針(資料P29~31)

- ・ 直接養浜箇所は具体的に決定しているか。
 - (事務局)冬季風浪後に実施する定期測量成果を踏まえてより効果的な箇所に実施したいと考えている。投入時期は地元漁協さんと調整しながら進めていきたい。
 - 3月定期測量を確認し、最も手当てが必要そうな箇所に実施することで理解した。投入量が5,000 m^3 と決まっているため、投入量から投入面積を試算しているか。
 - (事務局)投入範囲も3月定期測量を確認し、順応的に決定する予定である。

- 直接養浜前後のモニタリングを実施していただき、次回委員会にてご報告いただきたい。
- ・ 直接養浜に使用する砂はどうか。海上投入や陸上養浜は波によってふるいにかけて運ばれてくる粒径が決まってくるが、直接養浜の場合は粒径がバラバラになることを懸念している。
 - (事務局)陸上養浜で使用している砂と同じ砂を想定しており、羽咋川河口の堆積土を使用する予定である。また、令和5年度技術専門部会にて整理した今浜IC付近の陸砂もドライブウェイの粒径と比較して同程度であることを確認しており、活用する予定である。
- ・ 直接養浜は今回初めてという認識でよいか。また、来年度だけではなく今後の方針として直接養浜を継続するということか。
 - (事務局)緊急的に実施したことはあるが、維持ではなく回復を目的として実施することは初めてである。ドライブウェイは車の走行に支障が出ないように実施しなければならないが、今後は海上投入・陸上養浜・直接養浜の3つをそれぞれの役割を生かして実施していきたい。5.5万m³/年の養浜量で目標達成できる試算ではあるが、高波浪が顕著な年は侵食してしまうため、直接養浜の適量も検討しつつ実施していきたい。
 - モニタリングは重要であるため、今後も継続していただきたい。

(7) 海岸保全の意識向上のための取組み (ソフト施策) (資料 P32~36)

- ・ 特になし。

(8) まとめ (資料 P37~38)

- ・ (委員長)千里浜海岸と能登半島地震の地震帯はどのような関係にあるか、また千里浜海岸に近い邑知潟(おうちがた)断層帯との関係など、地震学の知見を今後の課題としてはいかがか。意見を伺いたい。
 - 能登半島地震における地殻変動や津波は、千里浜海岸への直接的な影響はなかったと認識している。委員長からご指摘いただいた長期的な変化については、海浜変形を検討する際に地質学的な観点は重要であると考えている。千里浜再生プロジェクト以前の委員会で広く調査や分析を実施されていると認識しており、まずはこれまでの検討内容の整理・精査から始めてみるのはいかがでしょうかと考えている。短期的なスケールに関して、千里浜海岸背後には天然砂丘と人工砂丘が混在しているため、長期的なスケールと合わせて整理したほうが良い。
 - (委員長)可能な限り自然に近い形で海浜を再生できるとよいと考えている。能登半島地震を機に地震学的・地質学的な基盤を明らかにしておく和良好的。技術専門部会でこのような整理を始めてみてもよいのではないかと。